

# 土佐のわらべ

第424号《第446回（2017. 3. 9） 子どもの本の読書会記録》参加者6人・文書参加3人

## 『 つづきの図書館 』 柏葉 幸子/作, 山本 容子/絵 講談社

主人公の桃さんは、ある日突然、付き合いのなかった叔母さんの世話をすることになり、生まれ故郷の四方山市に引っ越してきます。運よく採用された図書館で、出勤一日目のお昼休みに出会ったのは、絵本から出てきた「はだかの王様」でした。

王様の他にも、『オオカミと七ひきの子ヤギ』のオオカミ、『うりこひめ』のあまのじゃくなど、桃さんの前には愉快的な登場人物が次々現れます。彼らが探しているのは、かつて図書館で自分の絵本を借りてくれた子どもたち。もう大人になっている子どももいれば、まだ小学生の子どももいるのですが、子どもたちに共通しているのは、家族に何か問題を抱えている、ということでした。桃さんは王様たちに協力し、子どもたちを探すために奔走します。

どちらかというと地味でおとなしい印象の桃さん。叔母の杏さんにも、「不器用そう」とか「覇気もない」などと言われてしまうほどです。反対に、絵本から出てきた王様たちは、自由に勝手に放題。そんな自由な彼らと、振り回される桃さんの対比が面白くて、笑ってしまう場面もありました。可笑しかったのは、王様が病院の中で、昔自分を借りてくれた女の子を探すシーン。現実世界で、病院の中を上半身裸のおじさんが必死に走り回っているなんて、確かに大騒ぎになりますよね。あっけにとられる桃さんの気持ちが分かります。

しかし、最初は振り回されることを不本意に思っていたであろう桃さんが、だんだん王様たちに慣れてきて、いきいきしてきたように見えたのは嬉しかったです。さらに、昔の友達とも和解でき、お隣さんや図書館の館長さんとも仲良くすることができるようになった桃さん。人と関わることで、気持ちは明るくなるのですね。

どたばたな物語かと思いきや、最後まで読んでみると、人の縁の不思議さや愛しさが伝わるおはなしでした。桃さんの親世代が抱えていた家族の問題がだんだん明らかになったり、桃さんの大切な人が最後に突然現れたりなど、桃さんの今を取り巻く出来事の全てが、これまでに積み重なった人々の縁の結果に思え、すんと腑に落ちるラストでした。

桃さんの過去について多くは語られていませんが、きっと色んな苦労や寂しさを味わいながら、王様曰く「いい年」まで生きてきたんだろうと思います。しかし今寂しくても、別の場所で自分を気にかけてくれている人がいるというのは希望に思えます。反対に、桃さんや王様たちが、それぞれ遠くにいる大切な人を思い続けていたように、そばにいないけれど大事な人のことを考えることも、また素敵だなと感じました。

最後に、参加者の方の感想をご紹介します。

- ・親と子のつながりの描き方が深いと感じた。
  - ・絵本のキャラクターが、本を借りてくれた子を探す、という発想がすごい。
  - ・桃さんが手紙を書いていた「大切な人」とはいったい誰なんだろう、と想像しながら読んだ。
  - ・館長の片野さんがいい脇役だった。
  - ・真っ赤な装丁に「派手な本だな」と思っていたが、物語の内容とつながっていたのがよかった。
  - ・前に読んだときと印象が変わったけれど、それが悪く作用しなかった。
  - ・山本容子さんのイラストも物語と合っていた。
- (坂本 晴香)